



洋学文庫
文庫 8
C 77
1

西征記行





明治十三年四月一日余甥

吉田賛三帶義子海蔵之

事件出京寄宿于余家調

理了事又将還余嘗有省

濃之念而未果適得此好機

便約同行亦非偶然也

四月十二日

朝微雨頗之
而終日曇陰

午前六時十八

分賛三下回レノ京ヲ發シ七時汽

車ニ乘リ八時前加奈川驛ニ達

シ是ヨリ小田原名物ノ馬車ハ



41- 7473

ハ御慶シニシテ人車ニ乗ル時
方ニ仲春溪間ノ櫻隴上ノ菜
花ト相映シ細風習々醉顔ヲ拍
チ適^意不可言他日ノ愁懐頓消
敬シ了セリ蓋シ上天偉人ノ啓
行ヲ祝スルノ意アル歟十一時藤
澤驛若松亭ニ投シ晝飯ヲ喫
シ午後^{四時}十分湯本福住亭ニ投
宿シ直チ一浴シ始メテ黄塵ヲ
洗ヒ盡シ狀甚シ

あゝ君乃惠を乞ふ山崎
むの旅路を免れ
ふか那

湯本の宿あり

九年乃の毒の部をとれちて
以て湯のもをり 福住の家の

二

湯のほとり
その湯のほとり

之登の心をすの哉うるまじ

こま三

かたうきく淵をま川の

水のなるよ

驚ふれぬる

旅枕のり

十四日

朝細雨ツ
時正

七時福住ヲ費シ

三島驛ニテ晝飯ヲ喫シ沼津原

驛ヲ過キ吉原驛ノ東鈴川村ヨ

右折シ新道ヲ取リ午後五時

比田子ノ浦橋ヲ過グ橋長サ四五

十間北ハ富嶽ヲ正面ニ仰キ南ハ

駿洋シ渺漫シ眺ミ實ニ東海無

比ノ勝景ナリ

四の時富士乃首根の味ハ

つるき後田子の浦橋

晡前富士川ヲ渡リ八時興洋驛

大黒亭ニ泊ス

十四日 快晴 朝四時四十五分興津

ヲ獲シ七時半阿部川ヲ渡ル橋
ハ同地ノ富豪宮崎總吾氏已
ノ創立ニ係ルト云

阿部川乃橋を

宮崎總吾ぬし

ニ百^{ニホヤツセロ}竿間ふ

架け渡り

八時五十分宇津山を越ユ

むうーよりゆきよふふむ

宇都の山

空つらよふふふふふ

ふれ

午後一時大井川ヲ過ダ

大井川むのー保体乃

國をふれぬ

今ハ橋の役人とし身なる

金谷驛ニテ晝飯ヲ喫シ夫ヨリ

山路ヲ步行シ日改驛ヨリ人車
来リ掛川袋井見附驛ヲ經テ
六時天龍橋ヲ渡ル

天龍の流孔小架け

長橋

古堂初こむら虹にがは見み

七時早分濱招驛花屋總三
完泊ル

十五日晴朝五時三十分驛ヲ發シ流

船ふね駕が九時三十分新庄村に著ク

以も一いの濱名の橋を

流なが

水みづ著つ船ふね乃の著つ

流なが

舞阪懐古

旅人のゆきの栞しり

濱なみ松まつ風かぜ乃の著つ

午後一時三十分豊橋駅より晝
飯ヲ喫シ御油亦取リ經テ宿藏
寺ヲ過キ御身隱山ヲ遥拝シテ
感アリ

御身隱山

東照神名御免難シ
此山：遊ヶ給ヒテヨリ

御運ヲ開カニテ
カニタリト云を遥拝し奉りテ

引増ヨ御油も思ふ如
首杉の海より隱山

三十分
三時藤川驛ヲ過キ

五時岡崎驛傳馬町對馬寺

宿ス

十五日^六雨朝七時亭ヲ發ス昨夜ヨリ

雨今朝猶未タ霽レス車ニ油紙ヲ

覆ヒ葺陶地ハ難ク頗ル旅愁ヲ

覺ス大濱池鯉鮒ヲ過キ桶狭間

ノ古戰場モニ香ヲ奠スル由ナク勿々

ニ經過シ有招ニ抵ル時ニ雨益甚

シ此地有名ノ鳴海絞ヲ産ス

降る雨、軋る車乃

鳴海〜

旅の衣を

絞るそゝる

夫ヨリ笠三寺ノ笠ハ用井ズトモ
桐油ノ薫リ鼻ヲ衝キ憂結懊惱
言フヘカラス午後一時漸ヤク熱田
驛紀國^亭著キ晝飯ヲ喫ス雨稍ク
止ニ二時亭ヲ發シ熱田明神ニ賽
シ三時名古屋本町八丁目近江屋

清宅ニ投宿ス替ニ六當地菅原街

二丁目四十番地位小島政憲ヲ訪ヒ

夜同人ヲ携ヒ還リ来リ旅館ノ計

算及諸事ヲ料理シ又再ヒ政憲ト

同行別ニ去リ余ハ明日獨行美濃高

富ニ赴クノ心計ヲ定ム今日午後四時

比ヨリ天全ク晴ル

十七日^晴今朝六時三十五分名古屋ヲ

發シ八時四谷驛ノ一茶亭ニ少憩シ夫

ヨリ右折シ岐阜海道ヲ取リ一ノ宮駅

笠招加納ヲ經テ午後一時岐阜長
良川橋傍ノ茶亭ニ投シ晝飯ヲ喫シ
二時二十分山縣郡高富廿四番地伴
於齋宅ニ安著ス

十八日 晴 今朝春寒頗^レ料峭薄霜
アリ午前東京ニ郵書ヲ出ス今日手
打温飢饉鱈竹筍等ノ饗アリ

十九日 晴 今朝八時人車ニ駕シ伴家ヲ
發シ岐阜ヨリ車ヲ換エ呂久川橋傍
ノ一茶店ニ少憩シ夫ヨリ道ヲ赤阪ニ

取リ午後一時十分赤阪驛ノ一茶亭ニ
テ晝飯ヲ喫シ夫ヨリ車ヲ撤^キテ歩
シテ長相道ノ小徑ヲ取ル徑固ヨリ余カ
少時屢々往來セシ熱路ナレバ星霜ノ
久シキ或ハ茫洋歧路ニ迷フ所モアリ
彼ノ丘此ノ林亦夕依然舊容ヲ存シ嘗
テ父兄ニ隨ヒ採藥歧涉セシ地邊モ歷
々目睫間ニ現出シ來リ宛モ余ヲ笑
迎スルカ如シ或ハ稚招躑躅花ノ間ヲ
穿行シ左顧右盼坐ニ看遊ノ事

積リ回想シ感慨感喜交々モ心願
ニ集リ来リ更ニ道途ノ勞ヲ忘
覺エバ長招吉田ノ家ニ著キ又時
第三時ナリ姉君ハ余カ聲ヲ聞キ皇
倉喜ヒ迎エ互ニ安全ヲ祝シ積年ノ
話説述懐細々盡ル期ナク兄弟ノ友
交亦多言外ノ情味アリ夜八時贊三モ
マタ歸リ来リ皆一堂ニ集リ酒茶饗
饌款待至ラサル所ナク美濃米ノ精
飯筍ノ甘煮鰻鱈ノ蒲焼皆ナク又々

一種ノ郷味アリテ殊更客情ヲ慰メリ
十時前寢ニ就ク

廿日 朝薄曇 後晴 六時三十分起辱朝飯ヲ食

一煙ヲ喫シテ後姉君ト園圃ヲ周覽
シ又々東園ニ歩シ蓋宗林ニ入リ筍
三四根ヲ斲テ家ニ還リ抹茶ヲ喫
シ清味ヲ取ル午後贊三ト共ニ前溪
ニ出テ釣ヲ垂シ鯨十四五頭ヲ獲夕
リ時ニ茶名彦兄ヨリ書來以テ奈
リ招ク因テ六時吉田ヲ發シ大垣醉月
堂ニ到リ主人ト共ニ西肴ノ飯沼ニ抵

濃話時ヲ移シ十一時寢ニ就ク

廿一日 今朝霧 九時飯沼ヲ發シ舟町伊

鯖屋ヨリ乗名船ニ乗ル飯沼家僕與

六此事ヲ周旋調理ス十時三十分船

シ出ス午後六時乗名ニ著キ直ニ三

崎街五井徹道ヲ訪フ時ニ主人在ラス

細君迎工接ス話ニ話ニ去ッテ中寶

田町山田彦兄ニ詣ル兄喜迎工互ニ平

安ヲ祝シ濃話款待備ニ至ル五井

氏亦夕次テ来リ款晤時ヲ移シ

十時五分徹道辞シ去リ乃チ寢ニ就ク

廿二日 雨 七時起居中島七次訪来ル

七次寫影法ヲ以テ業ト為ス便ニテ彦

兄ト共ニ七次ノ家ニ赴キ技術ヲ看ル依

テ余ノ影ヲ寫ス午後太田治平氏来

訪ヒ棋三局ヲ圍ヒ時ニ五井氏余ヲ招

請ス乃チ彦兄及治平ト共ニ五井氏ニ

赴ク主人喜迎工盛饌ヲ饗ス今夜五

井ニ宿ス

廿三日 今曉 七時起居山田氏ニ還ル時

雨霽

治平来リテ先ツ在リ彦兄下棋ヲ
園々余モ亦數局ヲ園々午後五井
氏中島氏来晤シ刻ヲ移シテ辭去
ル明日汐干狩ノ遊ヲ約シ十一時寢
ニ就ク

廿四日 晴 六時起床十時小舟ニ駕シ

一新田地名上汐干狩ニ赴ク天氣晴和

風帖波平潮退洲出ツ士女老少隊

々羣ヲ成シ蛤ヲ拾フ余輩ホッ瓜クマテ杷

ヲ取り砂ヲ劃クサスガハ蛤ノ有名ノ

地少時三四斤許ヲ捕リ得タリ

乙女子可拾ハ瀉カハ採可ハ

海相子生ク未見モ何

時漁舟一隻漁鼓ヲ拍チ歸来ル要

シテ紡錘アサノ數頭ヲ買フ繪灸皆ナ

一段佳絶ノ滋味トス午後六時棹ヲ還ス

同遊者彦兄五井徹道中島七次太田

治平アリ夜徹道及ヒ一家團聚茶ヲ

煮談話刻ヲ移シ細君又タ余カ為メニ

按摩師ヲ招キ懇篤備ニ至ル十時寢
ニ就ク

廿五日 晴 昨夜ヨリ西風甚緊シク微寒

ヲ覺ユ六時三十分起蓐治平氏来リ

棋ヲ圍ハ午後六時二十分彦元及諸子

ニ分シ大垣部船ニ乘ル今夜月正望

月光蓬窓ニ入りテ晝ク如シ

廿六日 晴 今朝七時五十分舟大垣ニ著キ

飯沼武右衛門氏ニ抵ル主人家ニ在リ

酒饌ヲ饗ス定九氏亦夕来會シ棋五

六局ヲ圍ハ午後飯沼ヲ辞シ人

車ニテ長招吉田氏ニ還リ浴湯十

時寢ニ就ク○今日東京ヨリ郵書

著平安シ教シ来ル

四月廿七日

晴和午
後薄曇

今日將ニ赤坂ニ遊ビト

ス積三ト同シク午後十時家ヲ出テ

矢道村ヨリ青野ヶ原ニ入ル原中太

丘塚屢々ニ散在シ其數舉テ算スハ

カラス蓋シ是ニ皆ナ往古ノ墳墓ニ係

ル近年赤坂地方ノ酷奴此種ノ丘墳

數處ヲ發掘シ古劍古鏡勾玉鏡仗

等ヲ掠メ取ルリ夥シク昨年此ノ

悪業發見シ克徳ノ縛ニ就ク者四十許名ト云其古器大抵ハ官ニ没収シ現ニ東京山下博覧會ニ陳列セラル者亦此地ヨリ出タルモノ多シ余其五塚發堀ノ跡ヲ觀ルニ大抵地下三尺乃至四尺許ノ處ヨリ石ヲ置ニ長方形ノ石坑ヲ作ル古器或ハ骨片皆ナ此中ヨリ出タルモノト云ヘリ古事ニ感想シ原野ヲ彷徨スルニ多時遂ニ青野村官道吊中ニ出ツ仙道

尋ねぬもく 吊る袖乃

赤いもの

赤いもの

赤いもの

青野村ニ入り悪源義平及朝長

ノ古墳ヲ吊シ赤坂驛ニ抵ル

熊坂の名ハ残リ赤川志坂乃

相ノ下根名ハ赤川志坂ノ

此地ノ産物大理石及太湖石數塊

歳来ル今宵余カ為ニ曰樂ヲ燒キ
一家歡宴ス

廿九日 薄曇 今日故祖母晴霞名五十

四忌及生母入阿名ノ祭典アリ因テ九時

姉名ト入車ニテ西崎ニ抵ル夜兄及妹於

登為已テニ来リテ先ツ在リ午後四時

祭ヲ修ス會ニ臨ム者飯沼定九同武

衛河井周哉吉田總左工門及我

輩四兄弟ナリ宴止ニ客散ニ十一時

四兄弟一堂ニ寢卧シ尊中互ニ舊情ヲ

話說一段親密ノ濃懷ヲ催シ言

外ノ感喜ヲ悉セリ

廿日 雨 今日午前十時兄弟四人施主ト

為リ故慈齋翁三世龍夫君即子健
介名

四世龍夫兄ノ祭典ヲ修ス午後七時

主家ヨリ別ニ魚饌ノ饗アリ以テ今次

集會ノ煩ヲ表ス主家ノ款待備

至ル十一時二十分客散ニ寢ニ就ク

明治庚辰祭帛者于美
濃四月廿日兄弟四人

合同祭故父母君賦
之以獻

不接發咳都笑年

薰香と口打并前

神威享粟源開笑

兄弟甲人齋獻蓮

第六子宇興齋薰手謹書

五月一日 雨 午前七時起辱彦兄

棋數局ヲ圍ハ午飯後吉田姉若山

田彦兄伴於登為彦兄娘阿庄下目余

ク圓覺寺地中ノ先塋ヲ拂ヒ夫ヨリ

飯沼定九宅ニ至ル時ニ武衛已ニ先ツ定

九ト合議ニ酒饌吾等兄弟ヲ饗食ス

席上主人定九余為ニ釣狐狂言戯秘

ヲ演ス武衛脇手ワキヲ勤ハ皆テ正装ヲ

著ク頗ハ妙伎感服セシム主人ノ款

待駕志ノ程知ルヘシ此夜余彦兄ト武衛氏ニ
宿ス ○ 此下ニ續ク

三日 晴

朝六時起 尊妹於登為 伴俊尊

辭して高富に帰ル 今日南宮社 濃國 中大

社即國幣中社 高富長神社下稱 詣ヤシト 歎ス 便チ 定九

ト同シク 午前十時家ヲ出テ 步行シ 途

ヲ表佐村ニ取リ 十二時宮代村ニ抵リ

南宮ヲ拝詣シ 境内ヲ徘徊シテ 殿宇神

輿等ヲ觀 又夕余カ少時嘗テ此ニ遊ヒ

地邊ナドヲ 彷徨シ 感想スル 多時夫ヨ

リ 真善院 南宮ヲ北西ニ上ル 早許 抵リ 茶ヲ乞

フ 院主喜ヒ 迎フ 乃チ行厨ヲ開キ 瓢酒

ヲ飲ム 院主モ亦夕 村酒ヲ温メ 菜烹シ

供ス 話説 往者ノ事ニ 造ビ 院主傳來

ノ 園ヶ原古戦ノ 地圖ヲ 出シ 視セシム 亦

夕大ニ 考証ヲ 得タリ 三時此院ヲ 辭シ

山ヲ下リ 宮代村ニ 還リ 定九ト 別 定九

村ノ縁家ニ 逗留ス 至井驛ノ 東頭 相川橋傍

ノ 茶店ニ 少憩シ 此ヨリ 人車ニ 駕シ 四時

五分 長沼吉田氏ニ 帰ル 此日 山路ヲ 跋

渉シ 疲憊甚シ 晚酌 一浴ノ 後 早ク 寢

ニ 就ク

四日 晴 六時三十分起 蓐朝飯ヲ喫シ園

圃ヲ逍遙スルニ 茶芽恰モ好ク萌發ス

ルヲ見ル即チ新芽一籃ヲ摘ミテテ

ク焙製シ小半斤許ノ雀舌茶銘ヲ得即

時一煎之ヲ試ルニ芳香神ヲ醒シ極メテ

清味アリ 午後四時伴俊尊西遊同行

ノ物ヲ復ニ高富ヨリ來ル由テ明日叢途

西遊ノ事ヲ定ム 夜酒ヲ酌ニ閑話刻ヲ

移シ十一時寢ニ就ク

五日 晴 曉四時十五分起 蓐飯ヲ喫ス夫

又夕酒ヲ出シ叢途ヲ祝ス 五時三十分入

車 吉氏ヲ發シ 垂井ノ驛野上ノ里園原

モ勿々ニ過行キ 七時三十分不破ノ園ヲ

モ手巻ヲ持タス 乘リ道リ 車返地名

モ車ヲ戻サズ 令須ヲ越エ 森物語美濃近江

ノ園ヲ新道ヨリ脇ニ見成シ 八時三十分

柏原驛ノ一茶亭ニ少憩ス 此驛名

彦ノ 灸モグサヲ賣ル家多ク 前面ニ伊

吹山迹ヲ後身エタリ

灸モグサアウモグサる家立ちあふ 柏原

伊吹の山を目志る 日ふ

一車ノ軌ル音ニイ下、眠リ催シ醒ケ井
ノ宿モ夢中ニ經過シ番場驛ニ抵
リ稍ヤク目ノ醒ノタルモ可笑シ驛西
十丁許ノ處ヨリ新道從前磨針峠越
ヲ取リ十時十分江州米原港井筒近キ一里
亭ニ著キ晝飯ヲ喫シ汽船名號金
龜丸
ノ第一笛ヲ聽キ之ニ乗ル十一時五分
五分第三笛ト共ニ汽船費船ス此日
天極ノテ晴和風靜波平、湖上一
大素練ヲ張ルカ如シ

おんこの湖琵琶の湖

かきこらら
留乃よらら
漕き出らら

水蒸し一舟走ら船路乃

途この見の
波るらら
舟生島山

飛やうの雲のふらふらわ

比奈の根はく
比へ乃大山嶽

二時四十五分 水程九 右 即北 近沖島

即南位 見左 陸地 伊予山湖上 突出ス山

端品石斗絶シ上ニイサキ明神ノ祠堂

アリテ景色奇絶ナリ三時二十五分八

幡山 豐臣秀次 南一里許見奥島

ノ半里許ニ見ル三上山漸ク近キ木

濱燈臺ヲ左ニ堅田ノ雪見堂ヲ右

ニ見過ゴシ唐崎ノ招ヲ北六七丁ニ見テ

六時十分大津ニ上陸セリ迂リ大車

ノ賃ト八時三十分西京三條通東詰旅

亭淡路屋勢兼備ノ樓上ニ泊ス此宵

郷干ニ在リ車夫来リテ我等盛遊ニ

車夫 下京區第八組堀池町 木村清吉 二十五年 四月 森岡房吉 二十一年

隨行セリツ乞フ乃チ雇賦ヲ定メ明

日ヨリ三日間ノ隨後ヲ約ス

六日 晴 朝六時起蓐東山笑フガ如ク

近ク窓前ニ當リ頗ル景色清雅ニ趣

ツ占メタリ

山 の姿をたゞゆ

三十六年

の春の初乃花

いん

東山花のそと 打たす

二十六日

味中そのひ

りり

七時十分乗車、駕し亭ヲ葎し川東ヲ
返り二條橋ヲ渡り今出川ヨリ北野
ニ出テ天満宮ノ祠ニ賽ス

菅公廟ニ詣テ

少子抱る神の御まゐり

多し物も

我子の学の強や

進んでゐるやう

夫ヨリ比良野ヲ過キ金閣寺ニ抵リ
有名ノ庭ヲ一覽シ

金閣寺を觀テ有感
足利將軍
義満所建

年経るし一か所の閣

強りていふ

君も老るれいひか

清くは

又夕車ヲ返シ着御所中ノ博覧會
ヲ一覽ス其体裁畧々東京勸工博覧會
場ニ似たり古器物ヲモ亦夕多ク展

列セリ

乞ふるモノを覧らむものを所々ある

七
丁也

も乃志あらた免の

殿
礼

又

か
以好

こ

い
ま目

ころそ

館ヲ一覽シテ御園中ニ構エタレ割

煮店ニテ晝飯ヲ喫ヒテラ出テ又夕禁

裏御所ヲ拝觀ス日月御門紫宸

内侍所

殿清凉殿小御所ヲ始メ御園池等

其結構優美実ニ品評スルモ

文盛フミうる所ト女メおれレ丁也

九

宮ミヤヲ結ムスふツのノ明アカも

あ

淨園生ノのノ松マツ

と

小部コベヨリ字ナはル影カゲヲ

申マウス

拜觀ツ辛工午後一時宇治ニ向ケ車
ヲ走ラス時ニ天曇リ一霎ノ雨アレ瓦
相油ヲ草フホドニ至ラス二時十分伏
見稻荷前ニ少憩シ三時二十分宇治
里菊屋萬碧樓ニ投宿シ一憩ノ後
平等院ニ詣リ着蹟ヲ尋ント境内ノ
最勝院ヲ敲ク院主ノ僧出テ應シ哉
等ヲ請シ茶ヲ薦メ後堂ニ誘ナヒ開
祖藤原賴朝ノ画像源三位賴政ノ像
平等院ノ古圓古瓦及種々ノ着物觀

(通)即宇治ノ園也

セム當時ノ院主ハ天台宗上村教觀
ト稱シ比叡山ヨリ派出ノ僧ニシテ年
齡三十許頗學識アル者ト見エ頓悟
真率ニシテ古事ヲ談シ今時ヲ評ス
說話淡泊ニシテ亦夕梵境ノ高趣ア
リ時ニ大雨遽カ降リ来リ即チ去
ル能ハス是レカ為ニ淹留時ヲ移シ雨
少レク休クシ見テ辞シ旅亭ニ還ル

成ル果る別の氣取

あふあふ乃て是なり
名をそ留むる

一浴し燈下ニ日記を書き十一時寢
ニ就ク

七日六時起辱今朝天晴し清爽拭
フが如し

乙女子が木乃身搦りよと

以てはて

戸のとり匂ふ

山字治の四乃乃

立揃ふ乙女子袖乃者よ

匂ふ

木のそが搦むる匂ふ

歌乃留ふ

七時亭ヲ葺し黄蘗山ヲ一覽セト
山字治橋ヲ北ニ渡ル

梓ら乎々申るるん

毛のぬ乃

名よ海よたる

山字治の河波

サテ山内ニ抵リ僧ニ頼リテ七堂伽

藍ヲ巡覽ス此ノ寺ハ唐僧臨元禪師ノ開基ニシテ堂宇ノ結構極メテ宏

壯其柱梁ハ皆十天竺ノ木材ヲ用井其

規模総テ唐土ノ法ニ倣フ故ニ身殆ト

支那ノ寺觀ニ遊フ想ヲ成セリ又夕

本邦一切經ノ藏板スルハ此寺ノ事
一切經計ハ現ニ摺正ニ名方サニ之
リト云 萬四千卷
シ印刷ニ居リ

東之樂乃師寺ノ事ナリ

法乃一紙

此ヨリ途ヲ奈良ニ向ケ長池ニテ少憩
シ玉水村ヲ過キ十二時本津ニ抵リ
晝飯ヲ喫ス時ニ雷雨驟カニ來ル飯
了リ即チ雨止ニ天晴ル午後二時三

十分奈良印刷屋庄者ニ方ニ投宿シ

直ニ導者ヲ雇ヒ此地ノ名勝ヲ探

リ先ツ大佛殿ノ博覽會一覽ス其陳

列品ノ多キ宗ニ駭クニ堪エ殊ニ正

倉院所物ハ正真無疑貴重ノ珍

品少ナカラス古昔ノ事實モ思ヒ中ラニ嘆

感慨ノ情ヲ起セリ

博覽會

大館ヨリ志キ所ニ往ル

古の事乃知ル
大なる花

大佛殿をおく

蘇乃のひり乱れを經りし

盧舎那佛

光りを清き淨きなり

照る

夫より春日明神に詣す

高杉の殿も好む

春の山

神乃のまゝの姿を

たふさぐ

たし春をまて遊ぶに志あり

別を

春の山の

之を清くしよとす

六時旅舎の樓上泊る樓猿澤

池に臨み三笠山窓前當り其

景頗る奇絶なり

猿澤の池より流るる三笠山

流るる水の音を聞く

今日彼是巡覽ノ勞アリテ疲ル^ル見^レ九時寢ニ就^ク

八日晴 今朝非常ニ寒氣ヲ覺エ草ニ露霜ヲ帯フ五時起床六時亭ヲ發シ八時三十分木津川ヲ渡リ堤上ニ茶亭ニ小憩シ九時四十分長池憩ヒ十時三十分伏見豊後橋側宇治屋ニテ晝飯ヲ喫シ十一時西京石川ニ抵リ十二時進分ヶニ小憩シ午後三十分逢坂山ヲ越エ

海坂ノ笑^ム留^ル今^ハた

矢^ハ車^ノ通^ル名^ノ秩^ノ洞^ノカキ

一時三十分大津舟場ニ小憩シ此處ニ

召連^シ車夫二人^ニ暇^ヲヤリ二時二

十分山田^ノ汽船^ニ駕^シ三時山田

港ニ上陸此ヨリ伊勢^ノ市^ニ位^ノ車

ニ乘^リ六時三十分田川^ノ石部屋^迄

助方^ニ宿^シ九時寢ニ就^ク

九日晴 五時十分家ヲ發ス車夫頗^ル

力強ク阪路ヲ上下スル御車ノ法
ホク妙ヲ得タリ石部土山ヲ經テ九
時田村將軍ノ社前ヲ遥拝シテ

あゝたゞの何つまゝを
年らけし

淨靈をたゞ守る
ねむし

十二時二十分鈴鹿峠ニ到ル夫ヨリ
人車ヲ撤テ歩シテ山ヲ下リ坂下
驛ヨリ復タ人車ヲ賃ヒ筆捨山

ツ左リニ見テ

旅衣ソモ心も印たてし

咏も何かね筆捨山の山

十二時三十分関驛ニテ晝飯ヲ喫ス

大佛をまのふおきて今はいまの

関の地ををんぞ

おかし

半土俗
関ノ地蔵ニ振リ袖着せてる

ノ大佛尊よりふるト云俚歌アリ
故ニ口之ニ及ブ

驛ノ西今方ニ道路修繕ノ最中ニテ
橋梁ヲ毀テ土砂ヲ運ブナドニテ車
ヲ上下スルヲ屢々甚ク五月蠅ウルサニ在
野石師菜四日市ヲ經テ午後七時
末名山田彦九兄宅ニ著キ稍ク旅心
ノ苦ヲ安シテ爾來ノ旅況ノ物語リ十二時
寢ニ就ク翌夜復タ余ヲ為ニ按摩師
ツ招クナド懇切ノ款待ヲ受タリ

十日 昨夜雨
今朝晴

六時起床五井徹道氏

太田治平氏來リ訪レ旅況ヲ語り且ツ
棋ヲ圍ム午後五時三十分山田ヲ別レ
大垣通ビノ郵船ニ乘ル舟中ノ行厨
酒肴皆ナ山田氏ヨリ贈ラレ懇篤ノ情
感銘ニ堪ラス

彦九兄ニ別々ニ臨ミ

解カノ旨ヲ會フニ字カノ

あつたはり

兄カ名ノ

まはる

諸兄弟の會つを喜びし

赤楯のあつたる

字外

まゝも會つや

近うき年りよ

未名舟中十咏

手と足と祝の軒イビキ

はましし舟乃字也そ
一のくはまう
若

舟の合乃舟の嘯

操

吾界の内を

見る也地

舟歌の詠乃表

その面影も
ままのうみ

水よ字は

行く舟の槳カデの音をきく

郷音をきく

鐘カ子の淵を渡る

舟の音

鐘ヶ淵素名ヲ距ル北一里ニ在リ一名

蛇ノ宮トモ云蓋シ鐘ヶ淵ノ名穂當テ由

舟の音をきく

舟の音

境の沖を渡す

舟の音

千本松境共々地名

舟の音をきく

舟の音

舟の音をきく

舟の音

高須高津太田等地名

舟の音をきく

舟の音

舟の音をきく

舟の音

高須カス今尾イマノ猫地ネコヂ舟付フナツケ等々地名

鶴の志も夢の内みく

水門も

通してこころ

ノ廣し海の沖

スイミン
鶴の森水門 廣し海留す地名

大垣の堤よ沿ひり

今村也

舟の舟也よ着くそ

あつて

酒のきて夕へ来るを

あか

今朝大垣よ

あつて

十日 晴

今朝七時四十分大垣舟町

著キ一店に少憩シ飯沼 東九宅

列ル主人酒肴ヲ供ス十一時伴氏 又九宅

ト別ニ飯沼ヲ辞シ長招ニ赴キトス途儀

町片山孫左ヲ訪ヒ主人及ヒ北堂ニ

會と着話ヲ語り且ツ令吹ノ帰
途同行ノ事ヲ約シ十二時三十分
舟町ヨリ入車ヲ賃ヒ午後一時十
分長松吉田氏ニ還ル頃日東京ヨリ
到來ノ家信二通ヲ領取シ即チ報
書ヲ製ル數日ノ旅行頗ル疲倦
ソ覺エ夜九時後早く寢ニ就ク

十二日

晴

六時早起薄朝飯ヲ喫シ

主人家自製ノ新茶ヲ飲ム芳香

清味アリ今日少閑ヲ得枕ニ凭リ
雜事ヲ収録ス主人亦タ各種ノ
薔薇ヲ大垣ヨリ贈ヒ園中ニ布置
配植ス午後六時比ヨリ主人卜前溪
ニ網ヲ投シ鯉一籃ヲ獲時ニ細雨
霏々トシテ來ル乃チ網ヲ収メテ還
リ或ハ炙リ或ハ煮晚酌ノ下物ニ充
ツ亦タ妙趣アリ夜九時寢ニ就
ク沙夜雨點牆ヲ撲ク

十三日 晴 六時起蓐今日大垣赴

ントス午前十時替三下回シク家ヲ

出ツ替三余ヲ誘ヒ久世川 地名 割

煮家吉村樓上ル樓養老多岐

多良多度諸山連亘起伏シ東大

垣川ノ長堤南ニ延キ帆影ノ樹間ニ

隱見スルヲ望ミ頗ル勝景ヲ占ム

四顧應接ノ間酒肴已ニ盡ニアリ

鰻鱺ノ蒲焼鱒ノ塩炙其他各種

ノ珍味ヲ陳列ス満酌酔ヲ奉ケ樓

ヲ出テ舊友若曾根宗桂ヲ訪ヒ又

山中春洞ヲ依町余ガ實家ニ訪フ

春洞ハ余カ實父慈齋翁ノ門人ナリ五世龍

夫辞世ノ後相續ノ子幼冲未タ業ヲ次グノ年

齒ニ届ラス故ニ假ニ家ヲ春洞ニ託シ高居セシム

春能ク先師ノ業ヲ受ケ方今頗ル地下ニ名ヲ

鳴ラシ病容 主人喜ヒ迎ヒ酒茶款待ス
常ニ門ニ満ツ
今月十五日ハ地下八幡宮ノ例祭ニ
係ル故ニ市中ノ童男女今日ヨリ山
鉾ヲ曳キ鼓舞ヲ羣集ス時舟町

山門前、来ルト叫ブ立ッテ一覽ス亦
夕余ガ少時ノ光景ヲ想像セリ歎
刻ヲ移シ去ッテ飯沼定九ヲ訪フ主
人又夕酒ヲ供ス要事ヲ理シ去ッテ八
幡宮ニ詣シ八時吉田ニ帰リ一浴喫
茶九時三十分寢ニ就ク

十四日 晴 六時起床午十二時吉田ヲ
出テ荒川村ヨリ人車ニ駕シ大垣武
右宅ニ至ル主人嗜酒ヲ供ス時ニ舟
所山鉾門前ニ来リ舞伎ヲ演ス

即テ棧敷ニ出テ觀具飲ム片山孫
左近日事故アリ今次同行ノ約ヲ履
ム能ハズト聞ク由テ更ニ竹島町住木屋

太助ト同行ノ結約ヲ結口 太助ハ飛脚
ヲ業トシ毎月

一次東京ニ往来ス今月ハ十九日發足ノ由同行ノ約ハ
武者ニ依頼シ便理セシム

醉月堂ヲ訪フ主人又夕酒ヲ供ル
高富ノ郵書二通ヲ交付ス 伴俊尊ノ
贈哥ニ

いづくをまよわすれどもあはれり
かまこつわなむつともしあはれし 今夜此家ニ

一宿ヲ約シ七時比ヨリ出テ八幡宮ニ

諸ス市下ノ山鉾恙ク此境ニ湊マ
リ皆十無數ノ彩燈ヲ飾リ點シ順
次列ヲ成シ鼓樂シテ曳キ去ル極テ
美觀ナリ九時醉月堂ニ還リ棋數
局ヲ圍シ十一時寢ニ就ク

十五日 晴 六時起蓐今日茶事ノ當日
ナレバ市街毎戸棧棚ヲ設ケ花櫃ヲ
敷キ山鉾ノ通過スル候ツ余主人ト
酒ヲ飲シ棋ヲ圍キ午後二時神樂
通行奈儀全ク畢ル乃チ醉月堂ヲ辭

シ久吉川ヨリ人車ニ駕シ六時三十分長
招ニ歸リ晚酌一醉十時寢ニ就ク

十六日 雨 午後一時與六大垣ヨリ來ル
乃チ茶名彦兄ニ贈ル郵書一通ヲ附
託ス今日無事ナル故雜事ヲ輯録ス
夜十時寢ニ就ク

十七日 晴 六時起蓐午後零十分家
ヲ出赤阪地名ニ赴キ大理石文鎮ヲ購ヒ
一茶亭ニ憩ヒ草鞋ヲ買ヒ之ヲ穿テ金

生山即赤坂山ニ登ル坂路ノ途中氷塊ヲ

賣ル者アリ一掬ヲ買ヒ喉ヲ活ス清爽
頗^シ神氣^ヲ撥揮シ狀甚^シ且^ク嚼^ミ且^ク
登ル行ク十二三丁ニシテ平坦ノ地ヲ得^ル
又行ク二丁許虚空藏堂アリ堂後巨
崑直直立ス崑高二丈許周圍七八丈
崑ノ正面缺裂洞窟ヲ為ス窟中佛
龕ヲ安ス佛燈幽明更^ニ渴仰ノ念
ヲ尚^ス且^ク此ヨリ上巨崑大石壘疊
汽土ヲ見ス為獅子崑為屏風崑為
虎豹石為廊廡石千態萬狀方物ス

トス
地
マ
心
目
航
下
此
出
常
指
日
ト
テ
各
子
數
十
覆
地
國
行
葉
一
株
ア

ベカラス其中^{ゴトク}車轉々石ト名クル者高一丈
餘圍三四丈許一大巨石上ニ懸在ス石
石上ニ攀攀ヲ登リ指頭ヲ以テ其石ヲ
厭^テスニ容易^ニ動揺振顛^{シテ}者タ奇
ト云フヘシ其他奇崑怪石算狀^スベカラス
蓋シ此ノ如キ石山実ニ稀^ニ見ル所ノ者
彼ノ江州石山ノ若キモ恐^ラクハ一步ヲ讓
ルナクシ凝神望立多時ニシテ山ヲ下リ
赤坂驛ニ還リ又一店ニ小憩シ故路ヲ
取リ長沼ノ帰ル時ニ四時二十分ナリ

十八日 晴 六時起床 今日吉田ヲ出發

ノ期トス 朝飯後主人抹茶ヲ點シ

余進メ和歌ヲ以テ送別ノ志ヲ表ス

惜シムト思ハ困モ知れ

以君カ

あまや乃屋

あはせ

余モ亦夕之ニ答フテ

幾のうに阿はきあふ

毛

くさ

家

十一時ニモナリヌレバ早ヤ別宴ノ酒有

ク陳ラ子互ニ献酬數盃ヲ傾ケ

晝飯ヲ喫シ午後零十分午ヲ分テ

吉田ヲ發ス婦君ハ總名代トシテ長招

ノ東隣村荒川ノ東頭マデ見送り

給ヒ此ニテ別リ告ケ車ヲ走ラセ零

五十分大垣本陣ニ列ル主人酒肴

款待ス夫ヨリ西寄ニテ別ヲ告ケ

山中春洞郡上屋ヘモ音スレ醉月堂

ニ至ル主人亦夕酒肴ヲ供シ別意ヲ表

ス款刻昭ヲ移シ去ッテ本陣ニ還リ采

田太助昂子ニ明朝發程ノ刻限ヲ照

會ス晡七時吉田賛三故ニ長松ヨ

リ来リ別ヲ告グ日比野藤三モ来リ

訪フ時ニ西寄ヨリ重諾ノ酒肴ヲ贈

リ於多良氏自ラ来リ別ヲ告グ即ニ

重諾ヲ開キ献酬醉シ暮グ賛三藤

左辭ニ去リ盃盤ヲ収メ十一時寢ニ就ク

十九日 晴又薄曇 五時三十分起蓆六時二

十五分入車大垣ヲ發シ間道捷徑ヲ

取リ平村渡 伊比川 本郷渡 長良川 ヲ

越五九時駒塚村ニ達シ起川ノ下流ヲ

渡シ立石 美濃路 ニ出テ十二時五十分

名古屋廣小路ニ抵リ熱田明神ヲ一拜シ

又人車ニ駕シ池鯉鮒驛ニテ少憩シ

大濱ヲ過キ松原ニサシカル東矢矧村
ノ西端路左^{即北}半丁許ノ地田畝中ニ方
五六歩許新^{タニ}王垣ヲ構正小祠堂ヲ
立テリ之ヲ車夫ニ問フ、昨年此近地
ニ家ヲ建築スル者アリテエリ此畝ヨリ
運搬ス適^ク、鍬ニ憂然響キアリ、
寶光閃發ス怪ニテ之ヲ視ルニ一箇ノ
黄金瓶子ナリ仍^ホ戒慎鍬ヲ下スニ
又一箇ヲ得タリ^驚ヒテ之ヲ官ニ訴フ
官因テ其古蹟ヲ討鑿シ今ヲ大友

皇子ノ由儲アル見知シ更^テ其地ヲ封
シ此祠堂ヲ立ツルナリト號シテ大友
神社ト曰フ六時十分岡崎驛桔梗屋
半二郎宅ニ投宿シ今日發程ノ信ヲ
東京ニ報知ス九時三十分寢ニ就ク

廿日 晴 三時三十分起蓐四時二十五分
亭ヲ發シ九時十分豊橋小島屋源四
郎宅ニ至リ少憩シ午後十分新庄加
納屋ニ著晝飯ヲ喫ス二時汽船ニ駕
シ發、錨ス水行中細時々浅砂ニ膠

之船之カ為ニ滞流シ頗ル時暮ヲ費
ヤシ晡七時後漸ク濱松堀留ニ上リ
旅亭倉屋勝五郎宅ニ泊ス此舟路
一時頗便捷ノ賞譽ヲ得シモ^{ナカレ}近者
大ニ疎懶流シ敢テ進速ヲ競フノ念
ナク^恬然顧ミズ極メテ其聲價ヲ失
ヘリ然ルニ荒井ノ舊渡口ハ如今大
積發ヲ起シ此海路ニ大橋ヲ架設
セント^此流^已ニ其結構ニ著セシト云
項日
北大橋就ラハ行旅皆ナ途ヲ之ニ取

ルヲ疑フ容レズ新庄ノ船路ハ必然度
絶ニ歸想ヲ知ルヘシ懶惰ト勉強ト
究竟其成^果ヲ果シテ奈何十時
寢ニ就ク終^夜遠洋^艱難^聲ノ^聲ヲ聞^軒
頗^睡眠安ラ妨ク
廿日^晴 三時十分起蓐四時二十分暉ヲ發
シ同^シク四十五分天龍橋ニ抵リ五時十分
見付驛ニ達ス此車夫極メテ強健其走
ル飛^カガ如ク一時間ニ四里程ニ達ス^次
旅行中第一ノ健夫ト稱スハ九時

日改ニ少憩シ橋ヲ山ヲ越エ十一時
金谷驛ニ至リ飯晝飯ヲ喫シ藤
枝岡部鞠子ヲ過五時静岡ニ至
ル此ニテ三島迄ノ切手ヲ買ヒ江尾ヲ
徑テ六時三十分興津ニ達シ八時十
分蒲原柏屋ニ宿シ十時寢ニ就ク夜
廿二日六時起床今朝尚ホ未夕霽
レズ八時後稍ヤ霽^色ヲ見テ乃チ行リ
叢ス富士川ヲ渡ル比雨舍ク止ム午後

五十分三島驛世古六大夫宅ニ抵リ晝
飯ヲ喫シ此ヨリ轎ヲ賃ヒ七時二十分
箱根石内氏ニ投宿十時寢ニ就ク

廿三日 ^晴 朝四時箱根ヲ叢シ歩シテ
湯本マデ下リ此ヨリ人車ニ駕シ七
時⁺分田原驛ニ抵リ九時南郷ノ一
茶亭ニテ晝飯ヲ喫シ午後四時二
十五分加奈川驛ニ達ス時ニ汽車將
ニ叢セントスルニ會シ直チ之ニ駕シ ^{四時三十分}
叢車
五時三十分芝停車場ニ著キ夫レ

ヨリ途次便宜ノ用ヲ辨^理シ第七時我
家ニ帰リ一同平安安ヲ祝ス

題西征紀

行後

西征屢遊跨

長河海成

人事莫風流

胸中今拂

續年

漢當一

收棧

西征紀行終

二日晴

五時四十分起時着友土屋篤四郎

余カ今次ノ帰省ヲ本日檢テ訪ネル余輩兄弟

弟長招吉田氏ニ其會ニ誘引シ華宴ノ約アルヲ以テ

篤四其會ニ誘引シ同席シ余ハ十時ヨリ人車長招

ニ赴ク河合周載今朝ヨリ己ニ是ニ来リ主人

賛三下前溪ニ網ヲ投シ豫ノ鯨ヲ漁シ今日饗宴

ノ肴ヲ料ル午後三時ヨリ宴ヲ閉ク山海

ノ珍味盛饌アリ會ニ臨ク者飯沼定九同

武衛河井周載土屋篤四及余輩兄弟

ナリ五時篤四先呼ツ去リ宵九時武衛周載

辭シ還リ余輩兄弟及定九ハ當吉田ニ留宿ス

